

ホーン『否定の博物誌』覚え書(1) — 説明の探求 —

Some Notes on Horn, *A Natural History of Negation* (1)  
— In Search of Explanation —

加藤 泰彦  
KATO Yasuhiko

Laurence R. Horn, a leading scholar in contemporary semantics and pragmatics, published in 1989 *A Natural History of Negation*, a voluminous, but highly condensed, work. In this book, Horn deals with almost every major theoretical and empirical issue in the studies on negation and related matters, tracing back their origins through twenty-four centuries, and proposes a research program with original principles that has inspired and reoriented research in this field. Since negation is undoubtedly one of the defining properties of human language and cognition, Horn's work deserves careful and intensive examination, especially for those endeavoring to establish perspectives for future research.

The present essay is an attempt to extract several major issues discussed in the work, to elucidate the essential nature of Horn's investigations, and to discuss and locate the major results viewed from current theoretical linguistics. First, we will discuss the nature of explanation in linguistic theory, and argue that the orientation for deeper explanation, especially the search for a "principled explanation," advocated in the Minimalist program (Chomsky 1995, 2004, 2005), has been independently pursued in a parallel fashion in the neo-Gricean program (Horn 1984, 1989, 2005) where studies on negation have played a significant role.

## 2 加藤 泰彦

### 1. はじめに

人間のコミュニケーション・システムにはすべて、否定の表現形式がある。動物のコミュニケーション・システムには否定的な発話はなく、したがって真理値を付与したり、嘘を付いたり、皮肉を言ったり、偽ないしは矛盾する言明を扱うことはできない。人間言語における言語表示のほぼ離散的な特性と動物言語の完全に連続的な仕組みとの違いは、人間言語が否定と対立とを本質的なものとして用いていることから直接に導き出すことができる。(Horn 1989/2001<sup>2nd</sup>序文、p.xiii, 拙訳)

ローレンス・ホーン (Laurence R. Horn) の主著『否定の博物誌』(*A Natural History of Negation*) は、否定こそ人間言語の構造と運用とを性格づけるものであるという上述の言明ではじまる。自然言語の特徴はもちろん否定だけではないし、否定がとくに注目されたのもこれがはじめてではない。<sup>(1)</sup>しかし同書は、その射程の広さと洞察の深さとにおいて、現代の言語研究のなかで極めてユニークな位置を占める。書名からも想像されるように、論述は決して形式化されたものではないが、その思考は形式論理の深い素養に支えられたものである。本稿では、その考察の断片をいくつか切りとり、理論言語学が最近明らかにしつつある方法論的観点からその基本問題を明らかにし、ことばの研究の今後の方向を探る一つの試みとしたい。

## 2. 原理的説明 — ミニマリストの視点 —

### 2.1 妥当性の階層

Horn (1989) における否定とその関連現象の考察に入る前に、一般に、言語研究における「説明」とは何かという問題を、議論の大枠として考えておきたい。紀元前4-5世紀のパニーニ (Panini) によるサンスクリット語の研究以来、言語学の長い歴史において「説明」という視点を方法論の中核にすえてきたのは、前世紀半ばに言語学においてガリレオ的な転換<sup>(2)</sup>をもたらしたといわれる生成文法理論であろう。同理論のその後の発展は、その各段階において理論検証のための膨大な実証的研究を促し、経験科学としての基盤を築いてきたが、90年代に至って提唱されたミニマリスト・プログラム<sup>(3)</sup>に至って、理論の妥当性に関してもまったく新たな水準を問



#### 4 加藤 泰彦

が、一見整合しない場合もある。しかし中核部分においては、当該言語の諸特性は同妥当性を満たすシステムによって過不足なく、記述されるといってよい。たとえば、例を一つだけあげると、日本語という個別言語の記述的に妥当なシステムは、(2) (a)-(f) のような事実を適性にとらえるものでなければならない (\* は当該の文が非文法的であることを示す)。

#### (2) シカ-ナイ構文の基本パターン

- a. 花子は小説しか読まない
- b. \*花子は小説しか読む
- c. 太郎は [花子が小説しか読まない] と言った
- d. \*太郎は [花子が小説しか読む] と言わなかった
- e. \*太郎しか [花子が小説を読まない] と言った
- f. 太郎しか [花子が小説を読む] と言わなかった

(2)(a)-(b) の対比が示すように、XP-シカ (XPは任意の構成素) は、文中で否定要素ナイと共起しなければならない (このような要素を否定極性項目(negative polarity item, NPI) と呼ぶ)。これは (a) が (c) のようにより大きな文の中に埋め込まれても同様である。しかし、(2) (d)-(e) が示すように、文中に否定的な要素がありさえすればいつでも適格というわけではなく、シカとナイとが補文と主文に別れて現れる (つまり、補文境界がその間に介在する) 場合には不可となる。ただし、補文境界がある場合でも、シカとナイが (c) のようにともに補文のなかに現れるか、(f) のようにともに主文の中に現れる場合 — つまり補文境界が線状的には介在していても、構造的には介在していない場合 — には適格である。<sup>6)</sup> ここでの記述的な一般化はつぎのように述べることができよう。

#### (3) 記述的一般化

- (i) シカはナイと共起しなければならない (シカは否定文の中にのみ現れる)。
- (ii) シカとナイの間には補文境界が構造的に介在してはならない。

(3)(i)-(ii)の一般化を捉えているシステムは (すくなくともこれらの事実に

関しては) 記述的妥当性を満たしていると言える。

### 2.3 説明的妥当性

記述的妥当性は、当該言語のおよそあらゆる現象に対して(3)に相当する一般化が定式化されなければならないことを要請するものであり、現実にはその達成は(不可能ではないにしても)きわめて困難であることが予想される。実際、従来のあらゆる言語研究をみても、たとえどの一つの言語に対しても記述的妥当性が完全に満たされたと保証される例はないであろう。

しかし同妥当性の(ある局面での)達成は、問題の解決ではなく、むしろより根本的な問いへ向かう第一歩にすぎない。その「根本的な問い」とは、先のNPIの分析を再び例にとると、(i)日本語のNPIの振る舞いを観察すると確かに(3)のように述べることの出来る一般的な性質がみられる。しかし(ii)これは日本語だけにみられる偶然的な性質なのだろうか。(iii)もしそれが日本語だけでなく全ての人間言語に見られる特性(の反映)であることが事実に判明したとして、では「なぜ」人間言語には(3)に相当する性質が見られるのであろうか。

これらの問いが本質的に要請しているのは、およそあらゆる言語にみられる記述的一般化が、けっして個々の言語の(その時々歴史的な発展段階の)偶然の産物ではなく、それらが人間言語の普遍的特性の具体的、個別的な現れであることを示すことである。そのときにはじめて、個別言語の個々の記述的一般性が「説明」されたことになる。(3)に再びもどり、日本語のシカが否定極性項目(NPI)の一つであり、ナイがNPIの認可要素(licenser)であると(個別言語内で)指定すると、ここでの普遍的な原理とはつぎのようになろう。<sup>(6)</sup>

#### (4) 認可原理

- (i) 認可条件 — NPIは適切な認可要素により認可されなければならない。
- (ii) 局所条件 — その認可プロセスは同一節内に限られる。

もしこれらが人間言語一般の特性であり、また日本語という個別言語のシ

カとナイが該当する要素であることが認められれば、日本語の事実 (2)(a)-(f) は、ただ (偶然に) (3) のような性質を示しているのではないことになる。むしろ人間言語の普遍的な特性 (4)(i)-(ii) からみて「そのようであればならない」ということが示された — 従って、より深い「説明」が得られた — と考えられる。

一般に、個別言語における記述的な一般性が、言語一般の普遍性 (UG の原理) から演繹的に導かれたとき「説明的妥当性」が達成されたという。

#### 2.4 説明的妥当性を超えて

原理 (4)(i)-(ii) は、従来の否定に関する実証的研究の中で、具体的な定式化はさまざまであるが、広く一般原理として認められてきたものである。<sup>6)</sup> しかしここで、先の記述的妥当性への「根本的な問い」をもう一段階高いレベルで問うことが可能であろう。つまり、(i) 人間言語にはいったい「なぜ」(4) のような原理が働いているのか。(ii) これは人間の精神・脳の機構の中で、言語という一つの領域に固有の特性なのか、それとも (iii) ヒトという生物の他の機能、ないしはおよそ (生物を離れて) あらゆるシステムがもつべき特性の反映にすぎないのか、という問題である。

この問いは、Chomsky (2001/2004) によってつぎのようなやや異なった形で提出された。幼児による言語獲得を可能にするための初期条件 (initial conditions) は、(5) (i)-(iii) のような範疇にわかれる。

- (5) (i) 言語機能の初期状態  $S_0$  の要素で、外からの説明をうけない(言語固有のもの)
- (ii) インターフェイス条件 ( $S_0$  の要素で外部システムによって動機付けられたもの)
- (iii) (システムの) 一般特性

ここで「言語Lの諸特性がインターフェイス条件や計算の効率性といった一般特性によって説明可能であるとき」「原理的説明」(principled explanation) が与えられたという (Chomsky 2004, p.106)、つまり (5)(ii) と (iii) のみによって説明がなされた場合である。このとき可能な最も強い主張 — strong minimalist thesis (SMT) と呼ばれる — は、(6)である。

(6) (5)(i)は空 (empty) である。 (Chomsky 2004: 106 (2)-(3))

この (6) が成立したとき、説明は「説明的妥当性」を超えたことになる。なぜなら従来、UGによる説明（つまり、説明的妥当性の達成）とは、一般的な認知機構の原理やシステム一般の性質だけでなく、言語という領域固有の原理（したがって、他に還元されたり、他から導出されることのない原理）をも含めた説明をさしていたからである。これらの原理群全体が上述の意味での原理的説明を受け、さらに、そのような原理的説明が可能でない部分は存在しないと主張されたとき、説明は一気に「説明的妥当性」を超えたことになる。

SMTは、言語の普遍性の中には言語固有のもの（つまりそれ以上説明を遡ることのできないもの）はない、という主張を含むものであり、極めて斬新的かつ衝撃的なものと認識されなければならない。言うまでもなく「この問題は、すべての点において経験的なもの」(ibid.) であり、当面は実証的研究を進める上での高水準の指針としてその役割を果たしてゆくものと期待される。特に、最近多くの注目を集めている言語の進化論の研究、<sup>(8)</sup> 言語学と他の自然科学との統合の問題<sup>(9)</sup>を論じる際に、無視することのできないものとなろう。

## 2.5 認可条件－原理的説明の可能性－

さて、このような観点から先の原理群 (4)(i)-(ii) をみてみよう。予測されるのは、もし同原理が正しい方向を示すものであるならば、それらは言語固有のものではなく、隣接する認知機構とのインターフェイスの特性ないしはシステム一般の条件に還元され、そこから「原理的な説明」を与えられるはずである、ということである。では (4) の場合にはどのような可能性が考えられるであろうか。現時点では、言うまでもなく推測の域をでないが、一つの可能性は (7) のようなものであろう。

### (7) 最小労力の原理 (the Least Effort Principle)

与えられた問題解決のための労力を最小化せよ。

(cf. Zipf 1949, Horn 1989, Chomsky 1995)

当の原理 (4)(i)-(ii) はそれぞれ異なった方向から原理 (7) を具現化していると解することができる。まず (4)(i) は、NPIが（典型的には）否定文に現れること、つまり否定要素と共起することを要求するものである。これは、（特に、日本語のように否定辞が文末にくる言語では）当該の文が肯定ではなく否定文であることを早い段階で明示し<sup>(10)</sup> (Jespersen1917, Horn 1989)、その情報内容をより豊かにし<sup>(11)</sup> (Kadmon and Landman1993)、文処理における含意の範囲を限定する<sup>(12)</sup> (Dowty 1994)という機能を担う。一方、(4) (ii) は、文生成およびその処理の範囲を局所的な領域(単一の節内)に限定することにより、計算の効率性を高め、処理労力を最小化しようとするものと解される。もしそうであるならば、原理群 (4) は、人間の心的機構全体を支配する経済性原理 (7) により動機づけられ、その限りで原理的な説明を得たことになる。

ただし、原理の「動機付け」とその内容の「特定」との間には、少なくとも現時点では、ある種の乖離が存在する。つまり、原理 (4) がより一般的な経済性原理 (7) により動機付けられているとしても、ではなぜ自然言語では後者が、（論理的に可能な他の形によってではなく）(4) のような形で実現されているのか、という問いである。この問題を解消するためにはインターフェイスの条件を細部まで経験的に特定することが必要であり、この点でまったく新たな次元での実証的研究が要求されているといえよう。

以下では、妥当性の階層 (1) を言語研究が達成すべき目標として仮定し、否定とその関連現象の分析を基礎として、その可能性を探っていきたい。

### 3. 非論理的推論と経済性 — 上限規定の含意 —

妥当性の階層は元来、狭義の言語機能（つまり構造の構築にかかわる計算系）を対象としたものであった。しかしその対象をより一般化し、同プログラムの洞察とその基本的な方法を、（狭義の）言語に隣接する概念系をも含む広義の言語機能、<sup>(13)</sup>さらには言語運用の領域にも適用することは、可能であろう。以下では、言語運用と言語理解にかかわる語用論の領域における原理的説明への志向とその可能性をみてゆく。

### 3.1 記述的・説明的妥当性

一般に、文（ないしは発話）の意味には、二つの側面を区別することができる。(i)各構成要素の意味とその間の構造関係により決定される「合成的」(compositional) な意味 (Frege 1919/1977, Horn 1989, Heim and Kratzer 1998, Fodor and Lepore 2002) と、(ii) その他の非合成的な意味 (イディオム、語用論的含意、等) である。以下で扱うのは、(ii) の非合成的な意味のうち語用論的含意 (pragmatic implicature) とよばれる側面である (なお、この種の含意をも合成的に計算する最近の試みとして Chierchia 2004を参照)。

語用論的含意は、文（または発話）の表現から各種の「非論理的な推論」(non-logical inference) を経て導出されるものであるが、その派生の過程はけっして恣意的なものではなく、一般的な原理に支えられたものであることがすでに多くの研究により明らかにされてきた (Grice 1967, 1989, Horn 1972, 1989, 2005, Sperber and Wilson 1986, 1995, 太田 1980、等)。特に、Horn (1972, 1984, 1989) は、数量詞、否定、各種の程度表現などのいわゆる尺度表現 (scalar expressions) を含む文がもつ含意とその推論過程を明らかにしている。例として (8)-(10) をみてみよう。<... Q<sub>i</sub>... Q<sub>j</sub>... > は各種の表現による尺度 (scale) を表す (Qは任意の尺度表現で左方がより上位)。これらは一般にホーン・スケール (Horn Scale) と呼ばれる。

(8) < fifteen, ... , ten, ... one >

- a. Ten students passed the exam.
- b. No more than ten (ex. Not fifteen) students passed the exam.
- c. # Fifteen students passed the exam.

(9) < all, many, some >

- a. Many students attended the talk this afternoon.
- b. Not all the students attended the talk this afternoon.
- c. #All the students attended the talk this afternoon

(10) < beautiful, pretty >

- a. She's pretty.
- b. She's not beautiful.

## c. #She's beautiful

(8)、(9)のスケールはそれぞれ数詞、量化子を構成要素とするものであり、(10)は語彙自体の意味によるスケールである。スケールの成り立ち方はさまざまであるが、共通しているのは、いったんスケールが成立すると、それぞれのスケールのもとで「中間的ないしは弱い(下位の)尺度表現」を含む(a)の文が発話されたときには、通常「より強い(上位の)尺度表現」について成立する(c)ではなく、「より強い(上位の)尺度表現の否定」である(b)のような含意が、いわば言外の意味として発生するという事実である。例えば(8a)「10人の学生が合格した」といえば通常、(8b)「合格したのは10人以上ではない」という含意が生ずる。しかも注目すべきは、もし実際に(8c)のように「15人が合格した」という状況で(8a)「10人が合格した」と発話したとしても、それは偽にはならないということである。しかし明らかにそのような発話は「適切」(felicitous)ではない。

ここでの「弱い(下位の)表現を含む立言(qとする)」から「より強い(上位の)表現を含む立言(pとする)の否定」を表す含意を導く(非論理的な)推論の過程はつぎのようなものであろう。

## (11) 上限規定 (upper-bounding) の含意

< ... p ... q ... > のとき

$(p \supset q) \Rightarrow (q_{ct} \sim p)$  (太田 1980, p.198, 378)

つまり、同一のスケール上にある二つの量化表現が与えられたとき、上位の量化表現を含む文(p)が下位の表現を含む文(q)を論理的(語用論的)に含意するならば、q(という発話)はpが成立しないことを語用論的に含意する。

ではこの種の含意は、先の「妥当性の階層」の観点から(類推的にみると)どのように位置づけられるであろうか。確かなのは、同含意とその推論過程が、例としてあげた英語や日本語という個別言語において成立する(したがって当該言語における「記述的妥当性」を満たす)だけでなく、言語の類型をこえて普遍的に成立する原理、つまり「説明的妥当性」を満たす可能性もあるもの、ということであろう。では、人間言語一般において、

(11) が成立することを要請しているより上位の原理(つまり説明的妥当性を超える原理)は、この場合どのようなものであろうか。

### 3.2 原理的説明－二元的モデル－

ここで一旦、尺度表現を離れ、語用論的含意(言外の意味)が一般にどのような原理群によって計算されるのかをみてみよう。この問題は、Grice (1967)のハーバード大学での連続講義にはじまり、新グライス(neo-Gricean)学派や関連性理論(Relevance Theory)の誕生をうながし、<sup>(14)</sup>現代の意味論・語用論研究の中核をしめるテーマになってきたことは周知のとおりである。Grice自身の当初の関心は、論理学における基本的な演算子( $\wedge, \vee, \neg, \Rightarrow$ )とそれに対応する自然言語の表現(and, or, not, if)との特性の違いをどのように説明するかということであった。結論は、その差異は見かけ上のものにすぎず、自然言語の表現自体は論理的演算子と同一の意味をもつだけであり、その論理的な意味と自然言語の会話全体を支配している原理(公準)群との複合効果として、同差異が派生的に説明される、というものであった。特に注目を集めたのは、そこで提案された個々の公準が予想に反しておどろくほど単純なものだったことである(Grice 1967, 1989)。

#### (12) Griceのシステム

##### a. 協調の原理(Cooperative Principle)

会話の目的、方向から要請されるように会話上の貢献をせよ

##### b. 会話の公準(Grice 1967)

- (i) 「質」(会話への貢献を真となるものにせよ)、(ii) 「量」(十分な情報を与えよ/ 不要な情報は与えるな)、(iii) 「関係」(関連性をもて)
- (iv) 「様態」(明確であれ) (Grice 1967, 1989)

(12)(a) は基本原理であり、同時に対象とする領域を明示的に限定するものである。<sup>(15)</sup> 同原理は、(b) の4つの公準として具体化される。これらは、Horn (1989, p.193) がすでに述べているように「すべての理性的(rational)な交渉がその基礎とする一般的でおそらく普遍的な」ものであると考えられる。

会話の各種の含意がこれらの公準群からどのように派生されるのかという問題はそれ自体実証的に検討されなければならないが(詳しくは、太田 1980, Horn 1984, 1989, 等参照)、ここでのより基本的な問題は、これらの公準はいったい何を指し示しているのか、その背後のより根本的な要請とはなにか、という点であろう。公準の類型化の問題をとりあげた Horn (1984, 1989) の考察は、この点について一つの洞察に富む方向をしめしたものと考えることが出来る。彼によると、Grice の公準群は、二つの相対立する原理に振り分けることができる。<sup>(16)</sup> Horn (1989, p.197) はそれを先駆者の名を冠して「ジッフ・グライスの二つの力の対立」(the opposition of the two Zipf-Grice forces) と呼ぶ。その骨格を示すと次のようになる。

### (13) Hornのシステム

#### a. 聞き手志向の「量」の原理

- (i) 十分な(できるだけ多くの) 情報を与えよ
- (ii) 下限規定の原理 (→上限規定の含意)

#### b. 話し手志向の「関係」の原理

- (i) 必要な(最小限の) 表現をせよ
- (ii) 上限規定の原理 (→下限規定の含意) (Horn 1989: 194参照)

これらは、先にも述べた「最小労力の原理」(7) の現れである (ibid. 192f)。聞き手側の処理労力を最小にするためには、できるだけ多くの十分な情報が必要である。これは「それ以下ではいけない」という意味で下限規定の原理であり、できるだけ多くの情報をあたえたのであるから「それ以上ではない」という上限規定の含意が派生する。一方、話し手側の発話労力を最小にするためには、必要以上の表現を発しないことが必要である。これは「それ以上ではいけない」という意味で上限規定の原理であり、最小限の情報は与えたのだから「それ以下ではない」という下限規定の含意を発生させる。これらはその効果において互いに相反するものであるが、同時にお互いの適用を規制するものでもある(さもなくば、無限に多くの情報を与え続けるか、逆に一言も発しないという事態だけが生じることになる)。

Horn (1989) はこの二元的モデル (the dualistic model for non-logical inference) により、代名詞や空所化の解釈、語彙化、史的变化、否定解釈の様相、格のシステムの諸特性など広範な言語現象が説明されることを詳細に論じているが、その一つが、先にとりあげた尺度表現の語用論的含意(11)である。つまり、複数の表現が同一の尺度にのっている場合、より上位の項目を含む表現のほうがより下位のものを含む表現よりも情報量が多いことは明らかである。このとき、より下位の表現(を含む文)を発すると、量の原理(13)(a)によって、それが可能な限り強い言明であると解釈され、その結果「それ以上ではない」つまりより上位の表現(を含む文)が成立しないという含意が発生する。つまり先の(11)は、それ以上遡ることの出来ない原理ではなく、聞き手志向の(経済性)原理から実際の会話の運用にみられる個々の現象にいたる説明の過程の中で、いわば中間的な「定理」として位置づけられるべきものである。尺度表現の含意(11)が言語固有の原理であるとする、ここにもう一つの、説明的妥当性を超えた例を見たことになる。

ここで注目されるのは、会話の公準が言語固有のものではなく、人間の「協調的な」行動一般の原理であるという可能性が当初からGrice 自身(1989, p.28)により認識されていたことである。さらにHorn (2004, 2005)は、上の二元的モデルを一般化して「十分に行え」(Do enough)、過剰に行うな(Don't do too much)とし、これらは「目的志向の合理的な行動一般を統制する」(to govern ANY goal-oriented rational activity)ものであると述べている。つまり、二元的モデルの中核をなす量の公準は「労力の消費を規制する合理性に基づく制約の言語的現れ」(ibid.)であるという可能性である。しかし、これらの認識は現時点では未だ、研究プログラムの形に昇華されるに至ってはいない。

### 3.3 情報の非対称と経済性

二元的モデルを構成する「量」の原理(13)(a)と「関係」の原理(13)(b)とが、最小労力原理(7)の「現れ」(instantiation)であると上に述べたが、この「現れ」は決して単純なものでも直接的なものでもない。では両者を仲介している要因とはどのようなものであろうか。まず、(13)(a)と(b)には「十分 vs. 必要」「最大 vs. 最小」という対比のほか、「情報量 vs. 表現(形

式)」という違いが認められる。話し手志向の原理は、情報量の多少にも関わるが、その主眼は同じ情報を伝えるならば最小の表現をせよ、というものである。典型的には、いわゆる間接的発話行為 (*indirect speech acts*) がここに含まれる。<sup>(17)</sup>

この情報量の多少および量と形式への重点の置き方の違いは、結局は、発話に対する話し手と聞き手との関わり方の違いに起因すると思われる。話し手は同じ情報内容を最小の表現形式で伝えようとするのに対し、聞き手にとっては発話を解釈するに際して、その情報量が多ければ問題となるからである。これは情報の送り手と受け手との役割の違い、つまり情報の流れの方向に起因する非対称であると考えられる。もしそうであるならば、この領域で「説明的妥当性を超える」説明を可能にしているのはつぎの二つの要因ということになる。

#### (14) 原理的説明の構成

- (i) 最小労力の (経済性) 原理 (= 7)
- (ii) 情報の流れの非対称

これらは言語という領域固有の特殊性であるとは考えられず、さらに情報の流れの一般特性ということが問題になるのであれば、およそ生物界に限定されたものではないという可能性もある。経験的にどのような演繹的説明が可能になるのか、今後の課題としたい。

最後に、二元的モデルに関して、最小労力のもう一つの現れをみてみよう。問題は、同モデルが二つの相反する原理からなる以上、実際の適用に際してはその「対立を解消する」(Horn 1989, p.197) なんらかの仕組みが組み込まれていなければならない、ということである。ホーンが提案しているのは「語用論的労力の分業」(*the division of pragmatic labor*) とよぶ、一種の *Elsewhere Condition* である。その骨子は、より簡潔な表現は「関係の原理」(13)(b) によって無標の、固定化された意味に結びつき、より複雑な表現は「量の原理」(13)(a) を介して、それ以外の有標の意味に結びつく傾向がある、というものである (*ibid.*, 197)。例えば、*Can you pass the hot sauce?* と *Do you have the ability to pass the hot sauce?* とが与えられたとき、より簡潔な前者は依頼という固定化された意味に結び

つき(間接的発話行為)、後者はそれ以外の文字通りの意味に結びつく傾向がある。では、なぜ(その逆ではなく)このような対応関係が実際にみられるのであろうか。それは、ある与えられた文脈の中で最小の表現から適正な意味を読み取ろうとすれば、それは必然的に余計な計算をしなくて済む固定化された意味が選ばれる、ということであろう。このときの必然性を保証しているのが、経済性原理である。二元的モデルは、その構成だけでなくその適用においても、経済性に支えられていると考えられる。

このように「説明」とはどうあるべきかを問う妥当性の階層(1)は、理論的にも実証的にも、言語研究の在り方にまったく新しい局面をもたらすものと言える。同時に、そのような試みがすでに、否定とその関連領域においてなされていたことは注目されてよいであろう。

## 注

- (1) 太田(1980)、Horn(1989)およびHorn and Kato(eds)(2000)の巻末の文献を参照。伝統文法による先駆的な研究としてはJespersen(1917)、また日本における最も包括的な研究として太田(1980)を参照。
- (2) “the Galilean revolution”(Chomsky 2004b, p.94)。ガリレオの方法の科学史上の特徴についてはChomsky(2002)の第2-3章、およびUeda(2005)を参照。
- (3) Chomsky(1995, 2004a, 2005)等、および本稿2.4節参照。
- (4) 幼児の言語獲得の観点から見ると、UGはその初期状態についての理論であり、個別文法は安定状態についての理論である。つまり、説明的妥当性は初期状態についての理論が満たすべき要請であり、記述的妥当性は安定状態についての理論が満たすべき特性である。この限りで、二つの妥当性の区別は明確に存在する。しかし、初期状態であるにせよ安定状態であるにせよ(あるいはその中間のさまざまな段階を考えても)それらはみな(可能な言語としての)「心的状態」である。実際「言語機能はいつかの状態をもつだけである」(Chomsky 2002, p.131)といえる。そこで、「ミニマリストの諸条件は、初期状態もふくめて、言語機能のすべての状態で満たされなければならない」(ibid., p.130)と仮定する。つまり「すべての[心的]状態において、インターフェイスにおける無限の解釈可能性(infinite legibility at the interface)が、最適なかたちで満たされなければならない」(ibid.)と仮定すると、もはや初期状態と安定状態の区別も、またそれに応じて説明的妥当性と記述的妥当性ととの区別も、本質的なものではないことになる。これは、「S<sub>0</sub>[初期状態]ではすべてのパラメータが無標の値にセットされており」したがって「それぞれの状

態は (S<sub>0</sub>も含めて) 可能な (I-) 言語である」(Chomsky 2004a, p.104) という見方を含意する。この観点から、従来仮定されてきた理論的な枠組み (特に、UGの理論的位置づけ) をもう一度再検討することが必要になるとと思われるが、本稿では従来の二つの妥当性を認めた上で、考察をすすめる。

- (5) ただし、以下では論じないが、(2)(d) のようにシカとナイとの間に「構造的に」補文境界が介在していても、文法的であるケースもある。例えば、(i), (ii) のようにいわゆる形式名詞の補文 ([ ]で示す) を含む構文である。

(i) ぼくは [そのことを花子にしか話す] つもりはない

(ii) 太郎はいままで [数学しか教えた] ことがない

他の例および同現象の一般的特性については、Kato (1985, pp. 161-179), Kato (1987) を参照。

- (6) 任意の要素がNPIであるか否か、ないしはその認可要素であるか否かは、個々に指定されるべきものではなく、なんらかの一般特性に基づいて予測されるものでなくてはならない。認可要素については、その類がdownward entailment (上位集合からその部分集合への推論が可能であるもの) という論理・意味特性によって特徴づけられることがLadusaw (1979)により明らかにされた。その後の進展とその批判的検討については、van der Wouden (1977), 吉村 (1999) 等、参照。

- (7) Horn and Kato (eds, 2000)所収の諸論文を参照。

- (8) 言語の起源、進化については、ミニマリスト・プログラムの観点からも多くの論考が発表されつつある。

Hauser et al. (2002), Fitch et al. (in pres)、等参照。

- (9) 言語理論を自然科学の中に統合する可能性については、“unification problem”として Chomsky 自身もはやくから考察をすすめている。Chomsky (2000) の諸編、参照。

- (10) 否定文であることをなるべく早く示す傾向(特に、否定辞がその焦点に先行する傾向)は “the Neg First Principle” と呼ばれる。Jespersen (1917), Horn (1989, p. 446)を参照。

- (11) NPIが文の情報内容を豊かにするとは、例えば、“I don't have potatoes.” よりも “I don't have any potatoes.” のほうが「たとえどのようなものであれ」という含意を含む点でより強い主張をしている、ということである。Kadmon and Landman (1993) 参照。

- (12) NPI はなんらかの認可表現を必要とするが、認可表現はすべてその語彙特性として downward entailing (DE) の含意が成立するコンテクストを形成する。したがって、NPIを含む文を処理していくときには、文が潜在的にもちうる可能な含意の中から、DEが成立するものだけを解釈の候補として選べばよいことになる。その限りで文処理の負担が軽減される。Dowty (1994)、加藤 (1998) 等参照

- (13) 「狭義の」言語能力 (the faculty of language in the narrow sense) とは、回帰性 (recursion) に基づく言語の計算系 (シンタクス) をさし、「広義の」言語能力 (the

- language faculty in the broad sense) とは、概念・意図系や知覚・運動系をも含めた言語システムをさす。Hauser et al. (2002) 参照。
- (14) 新グライス派についてはHorn (1989, 2005)、関連性理論についてはSperber and Wilson (1986, 1995) を参照。両理論はともにGrice (1967)に端を発するが、相互の交渉がなく研究がすすみ、両者の比較検討の試みが始まったのはごく最近になってからである。この点については、Saul (2002) およびHorn (2005)を参照。
- (15) ゲーム理論 (Game Theory) などがはやくから対象としている非協調的 (non-cooperative) な領域はここには含まれない。ゲーム理論を語用論研究へ適用しようとする試みについては、Benz et al. (eds., 2006) 等を参照。
- (16) この還元主義は、すべての公準を「関係の公準」に還元しようとする関連性理論においてより強い形で現れているとも言える。しかし同理論が、実際に単一の原理に支えられたものであるか否かについては、より厳密な検討が必要である。特に、Sperber and Wilson (1986) の第二版 (1995) の "Postface" (pp. 255-279) および Horn (2004, p.28, fn.13) を参照。
- (17) 例えば「窓を開けられますか?」という最小の疑問表現をもちいて、それよりも情報量の多い「依頼」を表す。間接的発話行為については、Austin (1962), 太田 (1980, pp. 225f) 等、参照。

## 参考文献

- Austin, J. L. 1962. *How to Do Things With Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Benz, Anton, Gerhard Jäger, and Robert van Rooij (eds.) 2006. *Game Theory and Pragmatics*. New York: Palgrave Macmillan.
- Chapman, Siobhan. 2005. *Paul Grice: Philosopher and Linguist*. New York: Palgrave Macmillan.
- Chierchia, Gennaro. 2004. "Scalar Implicature, Polarity Phenomena, and the Syntax/Pragmatics Interface." Belletti, Adriana (ed.) *Structure and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Vol. 3* Oxford: Oxford University Press, pp. 39-103.
- Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. *New Horizons in the Study of Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 2002. *On Nature and Language*. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 2004a. "Beyond Explanatory Adequacy." Belletti, Adriana (ed.) *Structure and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Vol. 3* Oxford: Oxford University Press, pp. 104-131.
- Chomsky, Noam. 2004b. *The Generative Enterprise Revisited*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam. 2005a. "Three Factors in Language Design." *Linguistic Inquiry* 36, 1-22.
- Chomsky, Noam. 2005b. "On Phases." Ms., MIT.
- Dowty, David R. 1994. "The Role of Negative Polarity and Concord Marking in Natural Language Reasoning." *SALT IV*, pp.114-144.
- Grice, Paul. 1967. "Logic and Conversation." Ms. Harvard University. A reduced version is published in *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, (1989), pp. 1-143
- Fitch, W. Tecumseh, Marc D. Hauser, and Noam Chomsky. (in press). "The Evolution of the Language Faculty: Clarifications and Implications."
- Fodor, Jerry and Ernest Lepore. 2002. *The Compositionality Papers*. Oxford: Clarendon Press.
- Frege, Gottlob. 1919. "Negation." *Beitrage zur Philosophie des deutschen Idealismus, 143-157*. rpt in *Logical Investigations*. Ed. by P. T. Geach, New Haven: Yale University Press (1977), pp. 31-53.
- Hauser, Marc D., Noam Chomsky, and W. Tecumseh Fitch. 2002. "The Faculty of Language: What Is It, Who Has It, and How Did It Evolve?" *Science* Vol 298, 22, 1569-1579.
- Heim, Irene and Angelika Kratzer. 1998. *Semantics in Generative Grammar*. Oxford: Blackwell.
- Horn, Laurence R. 1972. "On the Semantic Properties of Logical Operators in English." Ph.D. diss., UCLA.
- Horn, Laurence R. 1984. "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature." Schiffrin, D. (ed.) *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications (GURT*

- '84) Washington: Georgetown University Press, pp. 11-42.
- Horn, Laurence R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: The University of Chicago Press. [Reissued 2001<sup>2nd</sup>. Stanford, CA: CSLI Publications.]
- Horn, Laurence R. 2004. "Implicature." Horn, L. and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*. Malden, MA. : Blackwell Publishing Ltd. pp.3-28.
- Horn, Laurence R. 2005. "Current Issues in Neo-Gricean Pragmatics." *Intercultural Pragmatics* 2-2, 191-204.
- Horn, Laurence R. and Yasuhiko Kato (eds.) 2000. *Negation and Polarity: Syntactic and Semantic Perspectives*. Oxford: Oxford University Press.
- Jespersen, Otto. 1917. *Negation in English and Other Languages*. Copenhagen: A.F. Høst.
- Kadmon, Nirit and Fred Landman. 1993. "Any" *Linguistics and Philosophy* 16, 353-422.
- Kato, Yasuhiko. 1985. *Negative Sentences in Japanese*. (Sophia Linguistica 19, Monograph) Tokyo: Sophia University.
- Kato, Yasuhiko. 1987. "Negation and the Bridge Effect in Japanese." *Proceedings of the Fourteenth International Congress of Linguists II*. Bahner, Werner et al. (eds.) Berlin: Akademie-Verlag Berlin, pp. 969-972.
- Kato, Yasuhiko. 1991. "A review, Laurence Horn, *A Natural History of Negation*." *English Linguistics* 8: 190-208.
- Kobayashi, Noriko. 2005. "On the Dualistic Model of Inference." Ms. Sophia University.
- Ladusaw, William A. 1979. "Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations." Diss. The University of Texas at Austin. [Published from Garland Publishing, Inc. in 1980]
- Nagel, Ernest. 1979. *The Structure of Science: Problems in the Logic of Scientific Explanation*. Indianapolis/ Cambridge: Hackett Publishing Co.

- Saul, Jennifer M. 2002. "What is Said and Psychological Reality: Grice's Project and Relevance Theorists' Criticisms." *Linguistics and Philosophy* 25: 347-372.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986/ 1995<sup>2nd</sup> *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Balckwell.
- Ueda, Masanobu. 2005. "On the Scientific Nature of Generative Grammar." Ms. Institute of Language and Culture Studies, Hokkaido University.
- van der Wouden. 1977. *Negative Contexts: Collocation, Polarity and Multiple Negation*. London: Routledge.
- Zipf, George Kingsley. 1949. *Human Behavior and the Principle of Least Effort*. Addison-Wesley Press. Reissued by Hafner Publishing Co. New York, 1972.
- 加藤泰彦 1991 「ローレンス・ホーン — 自然言語の意味と否定」『言語』 vol. 20, no.3, pp.90-97.
- 加藤泰彦 1992 「言語理論とパラメータ」『ソフィア』163号、pp.96-107.
- 加藤泰彦 1998 「否定極性の諸問題」(否定極性へのアプローチ (1))『英語青年』9月号, 322-324.
- 太田朗 1980 『否定の意味 — 意味論序説』東京、大修館。
- 安井稔 1978 『言外の意味』東京、研究社出版。
- 吉村あき子 1999 『否定極性現象』東京、英宝社。